

塚田秀雄 訳著

『ラップランドの自然と人—リンネのフィールドノートから』

古今書院 2020年5月 262頁 6,000円+税

本書は18世紀の植物分類で著名なカール・フォン・リンネ(1707~1778)による1732年5月24日から8月19日にかけてのラップランドの調査記録の塚田秀雄氏による訳出と、永長の北歐研究の蓄積のある同氏による詳細な紹介・分析である。本書については英訳本も含めて多数出版されているようであるが、塚田氏はラップランドの入口の街ウーメオにあるアカデミーが刊行した(2003-5)版を底本としている。リンネの著作についてすでに訳著者には『カール・フォン・リンネの地域誌—『スコネ旅行』に描かれた自然・経済・文化』¹⁾があり、それに続く塚田氏によるリンネに関する2冊目の著述である。なお、前著については、手塚章氏²⁾や菊地俊夫氏³⁾の紹介があり、本書についても、早くも金田啓珠氏⁴⁾や、村山朝子氏⁵⁾による紹介がすでにある。

リンネはスウェーデン国外の海外調査を実施することはなかったが、ラップランド(1732年)、ダーラナ(1733年・1734年)、エーランドおよびゴッドランド(1746年)、スコネ(1749年)と5回にわたってスウェーデン全土を対象とした調査旅行へ出かけ、それぞれに詳細な報告書が刊行されている。リンネの旅行記は、もちろん専門とする植物学上の記録も多く記されているが、さまざまな自然科学全般の領域やサーミの経済や文学にいたるまで博物学的な体裁をとることを特色とする。本書も特異な植物に関する記述はいうにおよばず、地質、地理、経済、サーミの文化などの多様な情報が盛り込まれ、当時の博物学的な記述の手法がとられている。ちなみにリンネは、このとき入手したサーミの民族衣装を、留学先のオランダで肖像画を描く際に着たり、これを着て社交界にも顔を出したりしていたと言われており、とくにお気に入りであったことがうかがえる。本書のトップをかざっているのがその肖像画である。

リンネの一連の旅行の費用は、政府からの予算を獲得しており、特に後半の調査旅行ほどはなからうが、政府の受諾研究の側面が強いといわれてきた⁶⁾。しかしながら、今回、訳出された『ラッ

ブランド旅行』が公刊されたのは遅く1811年のイギリスでの英訳本のものが最初であり、リンネの生存中は公刊されることはなかった。全体の3分の1を占めるといわれるラテン語のスウェーデン語訳を含めたものが出版されたのは、じつに1911年のものが最初とされ、第1次世界大戦直前のことである。だが、リンネ自身により表紙のタイトルなどが準備された形跡があり、生存中に『ダーラナ旅行』とともに公刊しようとした意志があったことをうかがわせるが、本書でもその結論は提示されていない。

さてラップランドはスウェーデン最北部からコラ半島にかけての地域を指し、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアにまたがる地域である。リンネは1732年5月12日から9月10日まで聖書も持たずに急ぎ足の調査旅行をした。往路はボスニア湾の西岸を、復路はボスニア湾の東岸を、総移動距離にして6,600kmにおよぶ。ただし、本書にはラップランド以外の往復の部分は割愛され、また8月20日から9月10日までのおそらくポートを利用してのエーヴェルトールネオ、ケンギス、ユノスアンドに旅したと推察される部分は記載がない。いずれにしても、滝などの急流では雇ったサーミにポートをかつがせ、調査機材などの荷物を自分で運び担ぎながらの強行軍であった。日誌のはじめの方には日曜日という記載もあるが、あとの方ではそれもなくなる。たまたに立ち寄る牧師館では若きリンネは、牧師たちのすべてのことを聖書に書かれている言葉によって説明しようとする彼らの態度に辟易する。後の代表作『自然の体系』でみせる神学的自然論とは一線を画すものであった。

前回訳出されたスコネのように、多面的な内容を自然や経済、文化、地域のように再編成をせず、リンネの記述したとおりの日誌形式をとっている。最初の旅行記であるフィールドノートであるゆえになのか、それぞれの日々の記述は詳細である。88日間の記録で、「特になし」という記載はわずか1日のみである(8月8日)。その主たる関心は植物や動物、鉱物などにあったと思われるが、その36日間にはサーミが登場し、食生活をはじめとして生活一般にわたっている。

ところで、リンネは牧師の息子に生まれ、父の出身校であるルンド大学で聖職者をめざすが、わ

ずか1年で植物園を有するウプサラ大学に移り医学の勉強をすることになった。1735年に留学先のオランダで博士号をとるが、それはマラリアについての論文であった。また日本では有名な『自然の体系』も1735年に第1版を出版したのをはじめとして、『ラップランド植物誌』、『植物学評論』など次々とが出版がなされるが、いずれもオランダでの実績である。金銭的な事情もあって帰国が遅れるが、1741年に母校のウプサラ大学の教授に就任した。しかし、専門は臨床・理論医学の分野であったという。

いずれにしても驚かされるのは、本書は若きリンネの考えが『自然の体系』神学的自然論とは一線を画すものであったことである。『自然の体系』では世界の中心をまず、第一に創造主である神におくが、本書では現代にも通じる自然の科学的観察的態度が読みとれるのである。

リンネの旅行記は近年に至るまでスウェーデンで新版が発刊され、スウェーデン本国では旅行記作家として今なお人気のある人物であるという。ラップランドの同時代史としての評価も高い。現在、リンネアン・ソサイティーの多くの資料をインターネット上のデジタル画像で閲覧できるとはいえ、著名な学者でありながら、リンネの文献を日本語で読めるものは少ない。その意味でも本訳著は貴重なものであり、地理学のみならず科学史への寄与という点でも貴重なものといえよう。また、巻末には前著の手塚氏の書評⁷⁾の指摘を反映してか、人名・地名・事項の索引が付されてい

る。いずれにしても北欧3か国の語学に堪能な氏ならではの労作であり、ラテン語のインターネット辞書を駆使して訳出された本書はあらためて氏の多才さが知られる一冊であるといえよう。

(矢野司郎)

〔注〕

- 1) 塚田秀雄訳著『カール・フォン・リンネの地域誌—『スコーネ旅行』に描かれた自然・経済・文化』古今書院, 2014。
- 2) 手塚 章：塚田秀雄訳著『カール・フォン・リンネの地域誌—『スコーネ旅行』に描かれた自然・経済・文化—』地理学評論87-5, 2014, 417-419頁。
- 3) 菊地俊夫：塚田秀雄訳著：カール・フォン・リンネの地域誌—『スコーネ旅行』に描かれた自然・経済・文化—』地学雑誌124-3, 2015, 41-43頁。
- 4) 金田啓珠：塚田秀雄訳著『ラップランドの自然と人—リンネのフィールドノートから—』地理65-9, 2020, 123頁。
- 5) 村山朝子：塚田秀雄訳著『ラップランドの自然と人—リンネのフィールドノートから—』人文地理72-3, 2020, 324-325頁。
- 6) トミー・イーセスコグ著, 上倉あゆ子訳『カール・フォン・リンネ』東海大学出版会, 2011。
- 7) 前掲2)。